

研究・調査報告書

報告書番号	担当
39	独立行政法人酒類総合研究所
題名(原題/訳)	
Alcohol consumption and colorectal cancer risk: findings from the JACC Study. (アルコール消費と結腸直腸癌の危険: JACC 研究からの発見)	
執筆者	
Wakai K, Kojima M, Tamakoshi K, Watanabe Y, Hayakawa N, Suzuki K, Hashimoto S, Kawado M, Tokudome S, Suzuki S, Ozasa K, Toyoshima H, Ito Y, Tamakoshi A; JACC Study Group.	
掲載誌(番号又は発行年月日)	
J Epidemiol. 2005 Jun;15	
キーワード	
飲酒、結腸癌、直腸癌、コホート研究	
要 旨	
<p>日本では 1990-1995 年までに結腸直腸癌の死亡率が直線的に増加している。これは食生活の変化、特に脂肪分や肉の摂取量の増加、食物繊維摂取量の減少によるものと言われている。この他にも、飲酒が潜在的な結腸直腸癌の危険因子であるとされており、1990-1995 年までに飲酒による結腸直腸癌の発生率、死亡率の増加が部分的に説明されている。結腸直腸癌予防対策として食物摂取は気にかけるが、飲酒はそれほど注意が払われていないのが現状である。今回、筆者らは JACC (Japan Collaborative Cohort Study) のデータを用い、飲酒と結腸直腸癌の関係を調べた。JACC では 1988-1990 年に 40-79 歳の男性 23,708 名、女性 34,028 名より、飲酒習慣を含む自記式問診票を用いて生活習慣の把握をしている。その後、1997 年の 12 月までの 7.6 年間、追跡調査を行い、418 名の結腸癌の発病と 211 名の直腸癌の発病があったことを確認した。発生率比 IRR (incidence ratio ratio) は比例ハザードモデルを用いて、算出を行った。非飲酒者と比較した場合、男性の元あるいは現飲酒者では結腸癌について 2 倍の発病リスクがあり、多変量調整 IRR (年齢、喫煙、ボディマス指数、肉摂取量等で調整) が過去の飲酒者で 2.01、現在の飲酒者で 1.97 であった。ただし、飲酒量の多少と発病率との関係は明らかではなかった。女性の元飲酒者では結腸癌の統計的に有意ではないものの発病リスクが増加していたが、現飲酒者(1日当りアルコール換算 22g 以下を摂取)ではリスクの増加はなかった。一方、本研究によって、男性と女性の現飲酒者において、1日当りアルコール換算 22g 以下の軽度の飲酒が直腸癌の発病リスクを減少させることが明らかとなった(多変量調整 IRR が男性で 0.61、女性で 0.69)。また、現飲酒者の男性で IRR はほぼ単一ではあったが、飲酒量が増加するに従って大腸癌の発病リスクは増加する傾向にあった(1日当りアルコール換算 22g 以下で多変量調整 IRR が 0.61 であるが、66g 以上では 1.32 となる)。</p>	